

# エディトリアル

市立恵那病院 内科部長 山田誠史

現在の医療は西洋医学が基本ではあるが、漢方製剤も保険収載されており、実際に多くの患者で使用されている。漢方医学は2001年より医学教育モデルコアカリキュラムに組み込まれており、小生の学生時代とは状況が変わっていると思うが、実際に研修医の先生に聞いてみても漢方薬をほとんど使ったことがないと言われることも少なくない。地域医療の現場ではさまざまな症状を訴える方が多く、体調や症状からアプローチする漢方治療が著効する例もしばしば認められる。本格的に漢方治療をしようと思えば診断を含め、ハードルは高いが、一般的に遭遇する症状に対して、治療のオプションとして考えられることのメリットは大きいと思われる。もちろん漢方薬だからと言って副作用が皆無ではなく、注意すべき点は多々あるためそういった知識も必要となる。

今回は実際の地域医療の現場で漢方薬を使用する上で、最低限知っておくべき知識、科別に頻度の高い症状に対する具体的な処方例を挙げていただくことで、漢方薬をほとんど使ったことのない医師でもあまり躊躇なく使用できるようになればと思い企画した。

村松慎一氏には総論として漢方治療の考え方、副作用などについて述べていただいた。これまでとっつきにくいと思っていた病態や腹診、およびそれに関連した生薬や製剤についても簡潔に分かりやすくまとめられている。吉永 亮氏には内科領域での治療に関して述べていただいた。小生もしばしば処方する半夏厚朴湯と補中益気湯を中心した内容であるが、思っていたよりも応用範囲が広いことに驚かされた。岡部竜吾氏には外科・整形外科領域での治療について述べていただいたが、われわれ家庭医がよく使う漢方薬を中心に、副作用や処方のバリエーションについての記載など非常にプラクティカルな内容になっている。大澤 稔氏には産婦人科領域での漢方治療について述べていただいた。小生も地域にいた時には更年期障害の患者さんに漢方薬を処方していたが、正直なところなんとなく処方していた部分も否定できなかったが、このようなフローチャートがあることでより適切な処方ができると思う。星野卓之氏にはそのほか漢方薬を使用することが比較的多いと思われる皮膚科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、眼科、精神科領域での実際の処方例について述べていただいた。いずれも比較的馴染みのある製剤について多く述べられているが、使い分けについて分かりやすく記載されている。

今回の特集では複数の筆者から“異病同治”<sup>いびょうどうち</sup>という言葉が見られたが、確かに西洋薬ではこのように多科にわたり同じ処方が使われるようなことは少なく漢方薬の適応範囲の大きさを改めて感じた。もちろん実際の地域の現場でここで紹介された製剤をすべて網羅することは困難であり、また必要でもないと思うが、漢方薬を使用することで診療の幅が広がることは確実である。本特集が地域でさまざまな訴えに日々直面している先生方の一助になれば幸いである。